

「クリエイターの話 ～ 私のイメージの源泉」

スペースデザイン部会員 川島 源次郎

『素材に翻弄されながら』

新制作に参加して 10 年目くらいの時期、「点と線と面」をひとつの立体の中に内在させたいというのがテーマでした。素材について、それまではイメージを形にさえできればいいと思っていましたので、板材や集成材を積層（貼り合わせ）することが多かったです。その方が大きさや形態を自由につくることができたからです。

新制作に参加するようになって、国内の様々な地域の人と出会えたことは大きな恵みでした。その人たちと作品や素材や技法について話せることは公募展の大きな魅力です。そのような関わりの中で、自分を対象化し、自分の置かれた環境を見直すこともありましたし、作品が変化するきっかけにもなりました。

私の住まいは家具産地が近いことから、木材が豊富に揃いやすいという環境にありました。これまで自分にとっては当たり前だと思っていたことが、次第に特別な環境だと思えるようになり「もっと素材についてよく考えて作品に生かさなければ」と考えるようになりました。無垢材を積層せずに、あえて素材の大きさや色に束縛されることで、意図や形を見出そうとした時期の作品です。

A



「珠積み」210×60×60 2010年 ウォールナット, 鉄, 木彫

点（珠）が連続して線（柱）になる様を表現しました。数珠をつくることで煩惱を断ち切ろうとしましたが、全く効果なしでした。やっぱり 108 個つくらないといけないんだということを知りました。

B



「水の庭」200×35×35 2012年 ウォールナット, 鉄, 木彫

点から面への動きをひとつのフォルムに収めようと思いました。雨の日に、藤棚の下に水たまりができているのを眺めながら、そこに落ちる雨の雫を元に形をつくりました。ウォールナットの質感がもっとも生きるのは曲線と磨きだと思い、そのことをストレートに表現したかった作品です。



「空を漕ぐ」 250×84×140 2013年 ビーチ, 鉄, 木彫

線（柱）から面、面から線への動きの様子を形にした作品です。魚釣りの最中に、ボートの櫂を見て着想しました。当初は櫂と同じくメイプル材かオーク材でつくろうと思いましたが、木材の流通や価格が不安定な時期で、代材として入ってきたビーチ材を使用しました。

●形は素材に委ねて

2019年に椎間板ヘルニア、2020年からコロナの蔓延、2021年の豪雨でアトリエが浸水、と想定外の事情により新制作展には不出品でした。その間、地元の作家や作品との交流が中心となり、かえって自分を振り返る有意義な時間でもありました。素材についても、建築廃材や鉄を使うなど実験的な作品をつくる中で、作品へのアプローチそのものが変化してきました。これまでは形のイメージが出発点でしたが、素材とのやりとりの中でコンセプトをつくったり、他者のマインドを想像しながらコンセプトをつくったりするのが出発点になり、形は素材に委ねるような制作も始めました。今年の新制作展に向けては、檜の廃材を使った作品をつくっています。ずっと木を扱ってきましたが、まだまだ知らないことだらけです。木の魅力に取り憑かれ、素材に振り回されて、これからも翻弄されながら続けていきたいと思っています。

D



「水の庭 2021」 70×20×20 2021 年 ウォールナット, 木彫

2012年の作品の展開として制作しました。ウォールナット材の質感で、面の交差を形にしたいと考えました。コロナ禍だったので「もしかしたら展示にいけないかも」と思いつつ、さらに運搬や陳列のことも考えてサイズを小さくしました。しかし、制作途中の8月11日から19日まで九州北部はひどい豪雨で長崎のアトリエが浸水したのもあって、新制作展には間に合いませんでした。



「波打つ地表」7×50×220 2022年 楠,木彫

数年前から「木を素材とするからには、触ってもらった方がいい」と思っていたのですが、新制作では初めて触る作品を出しました。コロナの影響で「手で触るにはまだちょっと・・・」みたいな風潮がありましたので「触っちゃダメなら足で踏む作品ならどうだ」という乗りで着想しました。これまで素材として扱いきれなかった曲がった楠の枝を使い、とにかく薄く削るだけ。鑑賞者が「薄くて乗っても大丈夫なの」というマインドと、足の裏から感じる感触という「鑑賞者の体験によって成り立つ作品」をコンセプトにしました。

川島 源次郎 プロフィール



- 1977 長崎県生まれ
- 1999 新制作展 初入選
- 2002 佐賀大学大学院教育学研究科修了
- 2004 新制作展 新作家賞受賞（同、06年受賞）

- 2005 ヘルシンキ芸術デザイン大学へ留学
(現アールト大学美術・デザイン・建築学部)
- 2007 GJ アートレインボー展 (ドイツ)
新制作展 会員推挙
- 2008 アジア芸術祭 (韓国)
佐賀銀行文化財団新人賞
- 2017 一般社団法人 金富良舎 (コンプラシャ) 設立
- 2018 三人の手しごと展 (福岡 weeks ギャラリー)
- 2019 三人の手しごと展 (福岡ギャラリータジェール)
- 2022 「木と紙の出会い」二人展 (唐津・A3 ギャラリー)

1977 年長崎県波佐見町生まれ。佐賀大学大学院教育学研究科修了。

2005 年からヘルシンキ芸術デザイン大学へ留学し、フィンランドの美術教育を学ぶ。

現在は、福岡女学院中学校・高等学校で美術教師として勤める傍ら、彫刻・木工・デザインの作家としても活動中。

「子どもたちの未来に必要な教育とは？」をテーマに全国各地で様々な実践研究を行いながら、「教員研修」「職員研修」「教育講演会」など教育関係者や行政・自治体、保護者に対して講演会やワークショップも行う。

2017 年には地元長崎県波佐見町に、一般社団法人金富良舎 (コンプラシャ) を設立し、波佐見町を拠点とした文化・アートの交流事業や陶磁器商品の開発を行う。金富良舎のサイトはこちら <https://comprasha.com>

新制作協会スペースデザイン部 会員

福岡女学院中学校・高等学校 教諭

一般社団法人 金富良舎 理事